

Title	「日本民俗学入門」「日本民俗学」講義における取り組み
Author(s)	松村, 薫子
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター 授業研究. 16 P.1-P.9
Issue Date	2018-02-05
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/68135
DOI	10.18910/68135
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

「日本民俗学入門」「日本民俗学」講義における取り組み

Efforts of “Japanese folklore” and “Introduction to Japanese Folklore” lectures

松村 薫子

【要旨】

留学生を対象に日本民俗学や日本文化を教える際には、日本人学生に教えるのとは異なる難しさがある。日本民俗学は、日本の生活習慣や歴史、文化などの知識がある程度ないと深く理解できない面が多く、似たような生活習慣がある国や日本と歴史的に関わりが深い国の学生であれば比較的理解しやすいが、全く異なる場合は理解が難しいことが多い。

そこで、本稿では、大阪大学日本語日本文化教育センターで開講している「日本民俗学入門」（秋～冬学期）「日本民俗学講義」（春～夏学期）の二つの授業を行うなかで論者が難しいと感じた点や、試行錯誤するなかで留学生に伝えるために工夫してきた点をまとめ、その成果や留学生の反応などについて述べる。

はじめに

留学生を対象として日本民俗学や日本文化を教えたことがある先生方は、日本文化をわかりやすく教えることの難しさに頭を悩ませた経験があるのではなかろうか。少なくとも私はその一人である。大阪大学日本語日本文化教育センターで留学生に日本民俗学を教えるにあたり、参考になりそうなテキストや講義方法等を探してみたことがあったが、日本語についてのテキストが大半で、留学生向けに日本民俗学や日本文化をわかりやすく教える方法について書かれたものはほとんどみつけることができなかった。そのため、留学生たちに、どのようにしてわかりやすく日本民俗学を教えるのかということに日々悩み、工夫と改善を繰り返しながら講義を行うことになった。大阪大学日本語日本文化教育センターに来る留学生は、世界各国からの留学生であり、歴史や文化の背景がそれぞれ異なる学生である。日本民俗学は、日本の生活習慣、日本の歴史などの知識がある程度ないと理解しにくい面が多く、似たような生活習慣がある国の学生であれば比較的理解しやすいが、全く異なる場合は理解が難しい。ゆえに、日本人学生に対して日本民俗学を講義するのと同じ教え方では伝わらないのである。しかし、前述するように参考になるものはないので、講義を実際に行いながら試行錯誤を重ねることとなった。おそらく、他の大学でも同じように日本民俗学や日本文化等の文化関係の科目を留学生に教えておられる先生方も試行錯誤をされているのではないだろうか。

そこで、本稿では、大阪大学日本語日本文化教育センターで開講している「日本民俗学入門」（秋～冬学期）「日本民俗学講義」（春～夏学期）の二つの授業を行うことを通して、難しいと感じた点や、試行錯誤するなかで留学生に伝えるために工夫してきたことなどをまとめ、その成果や留学生の反応などについて述べてみたいと思う。これはあくまでも、個人的な取り組み内容ではあるが、講義の一事例を示すことで、同じく留学生向けに文化関係の科目を講義されている先生方と講義方法に関する情報を共有し、新たな教授法についての議論につなげることができれば、のちに充実した日本文化の教育方法へと発展する可能性があるのではないかと考える。

以下より、「日本民俗学入門」（秋～冬学期）「日本民俗学講義」（春～夏学期）の二つの授業

で取り上げた内容と工夫した点、学生の反応について述べる。

1、「日本民俗学入門」（秋～冬学期）の内容について

大阪大学日本語日本文化教育センターは、基本的に10月から新年度が始まる。ゆえに、秋～冬学期は、留学生が来日したばかりということもあり、民俗学の入門編となる「日本民俗学入門」の講義を行っている。学生の日本語能力は、中上級レベルを対象としている。最初にこの講義を受けてもらい、日本民俗学や日本の文化についての基礎的な理解が深まった半年後の春～夏学期からは、もう少し詳しく分析した内容を盛り込んだ「日本民俗学講義」を行っている。

秋～冬学期に行っている「日本民俗学入門」全15回の講義内容は下記のとおりである。

- 第1回 日本民俗学とは
- 第2回 食生活
- 第3回 住居
- 第4回 衣生活
- 第5回 仕事
- 第6回 結婚
- 第7回 出産
- 第8回 葬送儀礼と先祖祭祀
- 第9回 年中行事
- 第10回 祭り
- 第11回 神と仏
- 第12回 民間信仰
- 第13回 妖怪伝承
- 第14回 現代に活用される民俗
- 第15回 授業についての感想文を書く

第1回から第14回までが講義で、第15回目が授業についての感想文を書く時間となっている。第15回目の感想文は、テストに相当するもので、講義内容で興味を持ったものや授業全体の感想について書いてもらう。成績評価は、この感想文が50%、あとの50%は出席、授業中の態度で総合的に評価するようにしている。

日本民俗学のテキストにあたる概説書は日本人向けのものはいくつかあるが、これらをそのまま留学生に教えると難しいことが予想されたので、そのままテキストに用いることはやめた。しかし、全く何も参考にせず一から講義内容を組み立てることもまた困難であるので、初心者でもわかりやすい概説書の一つである谷口貢・松崎憲三編『民俗学講義－生活文化へのアプローチ』の章立てを参考にしながら、来日したばかりの留学生が知りたいであろう日本の文化全般にわたる内容を盛り込んで各回の講義内容を設定することにした。

本講義を受講する留学生は、大半が初めての来日か、自分の国の大学で文化関係の授業をほとんど受けたことがない学生ばかりである。もちろん一部の大学では、文化を教えている大学もあるが、ほとんどの学生は日本の生活習慣全般や日本文化についての一般的な知識を知らな

い状態である。例えば「田んぼ」と言ったときに、「田んぼ」の映像がすぐ頭に浮かぶかということ、全員すぐ頭に浮かぶわけではないといったようなことである。（しかし、近年では、残念なことに日本人の大学生も「田んぼ」の映像をすぐ思い浮かべられない学生がいるとも聞く）また、秋～冬学期の「日本民俗学入門」は、中上級レベルの日本語能力の学生も受講するので、難しい単語もあわせて理解しにくいときがある。それゆえ、日本人であれば当然知っているものや、無意識のうちに共有しているものなども含め、まずは全般的なことから教えることにした。日本人からすれば、当然とされている生活習慣の一つであっても、それぞれの意味を説明することで、日本人の生活や文化がどのような考え方のもとで作りだされているのかということへの理解が深まるのではないかと考えたからである。また、日本人にとっての常識や、自然と身につけている風習などについての知識を身につけた上でなければ、秋～冬学期からの民俗学の研究成果を含めた講義が理解しにくい。ゆえに、事前学習的な意味あいをもって、この講義を行っている。

さらにこの講義では、日本の生活習慣や文化を学びながら留学生が自らの国との違いに「気づく」ことも目的の一つとしている。自国の生活習慣や文化は、日頃、自国で生活している中では、それがどのような意味があり、他の国とは異なる素晴らしいものがあるということに気がつきにくい。日本人学生も外国に留学すると改めて自国の良い部分について気がつくという。大阪大学日本語日本文化教育センターに來ている留学生たちからも同様の気づきについての話を多々耳にする。加えて、文化の違いというものを理解することは、「異文化理解」そのものであり、「異文化理解」は自分と異なる他者理解を可能とするので、日常生活において役立つことが多い。ゆえに「日本民俗学入門」では、留学生たちに日本文化の全般的なことを理解してもらうだけでなく、「異文化理解」の力も身につけてほしいという願いを込めて講義を行っている。

2、「日本民俗学講義」（春～夏学期）の内容について

春～夏学期は、半年たって留学生が日本の生活に慣れ、様々な知識等もついてきた段階である。そこで、「日本民俗学入門」よりもさらに深めた内容の講義を行っている。受講する学生の日本語能力は上級レベルを対象としている。秋～冬学期に中上級レベルであった学生も半年たつとほとんどこのレベルに達しているので受講することができる。「日本民俗学講義」の内容は下記のとおりである。

- 第1回 日本人の生活における民間信仰
- 第2回 千羽鶴にみる民間信仰
- 第3回 千人針にみる民間信仰
- 第4回 袈裟製作団体の活動にみる民間信仰
- 第5回 四国遍路にみる民間信仰
- 第6回 日本の妖怪文化の歴史
- 第7回 百鬼夜行絵巻に描かれる妖怪行列
- 第8回 付喪神絵詞に描かれる器物の妖怪
- 第9回 稲生物怪録に描かれる妖怪
- 第10回 化物婚礼絵巻に描かれる妖怪

- 第11回 酒吞童子に描かれる鬼
- 第12回 浮世絵に描かれる幽霊
- 第13回 絵本や漫画に描かれる河童
- 第14回 地域興しに用いられる妖怪
- 第15回 授業についての感想文を書く（自分の国との比較もする）

「日本民俗学講義」では、「民間信仰」と「妖怪」という留学生に関心が高いテーマを取り上げて講義を行っている。とくに近年、世間的にも、また、研究としても人気が高まっている「妖怪」は留学生の関心が非常に高い。時々、「妖怪」を大学院で研究したいという熱心な学生が質問に来ることもある。

「民間信仰」と「妖怪」というテーマだと、大変特殊な知識を教えているのではないかと一見誤解されがちであるが、決して特殊な知識を教えているのではない。「民間信仰」や「妖怪」という特殊に見えるテーマからも他のものと同様に日本文化の面白さや特徴が見えるのである。さらに日本文化を学ぶときにあまり教えられていないであろう日本人の暗い心の闇の部分から生み出された文化への理解が深められるのである。一般的に日本文化は、お茶やお花、着物、和食、漫画など、美しく明るく楽しい良い文化ばかりが強調されがちであり、おそらく日本文化を教えるときも良い面が中心になっているのではないかと思われる。しかし一方で、それとは反対の、「ねたみ、そねみ、恨み」といった日本人の暗い心から生まれ出た文化もある。それを見ることで、文化には美しく明るいという良い面だけでなく、ねたみ、そねみ、恨みといった暗くて悪い感情から発生したものがあるということや、それらも見方を変えれば非常に興味深いものであることを理解してほしいと考えた。それは、自分自身の心の中を見つめ直したり、他者への深い理解にもつながる力になったりするのではないかと思うからである。秋～冬学期は、どちらかという日本文化の魅力的な良い部分を伝える講義内容であるが、春～夏学期は、日本文化の暗い面を見てほしいと思い、このような講義内容を設定している。

3、授業を行う上での工夫と学生の反応

ここまで、「日本民俗学入門」と「日本民俗学講義」の内容について述べてきた。次に、それぞれの授業において工夫をしている点や留学生の反応について述べたい。

3-1 画像の多用と話し方の工夫

先述するように、講義を聴く留学生たちは、世界各国から集まった文化的背景の異なる学生たちであるため、一つの単語を発したときの理解度やイメージの仕方が異なる。また、自国で日本の歴史や文化についての講義を受けたか否かによっても理解度は異なる。そしてさらに、私の発音が悪い場合には、単語の意味そのものが伝わらないこともある。「日本民俗学入門」は中上級レベルの日本語能力者を対象としているため、難しすぎる単語や文法を使うと理解するのが困難になる。そこで、どのような理解度や日本語能力の留学生でも理解しやすいように画像を多く見せることと、ポイントを押さえたわかりやすい日本語をはっきりした発音で話すという二つの点を心がけて講義を行うことにした。これらの点は、留学生に対して講義を行っている先生ならば行っておられるとは思いますが、まずその点は必ず行うことにした。講義ではパ

ワーポイントを用いることにし、パワーポイントには、簡潔でわかりやすい日本語の説明文と、その説明が一目で理解できる画像を多く入れることにした。毎回、このようなパワーポイントを準備するのは正直なところ時間がかかり大変だが、日本人の学生とは異なり、留学生に対しては、やはり画像を見せるのと見せないのでは学生の反応が異なる。まさに「百聞は一見に如かず」である。画像を見せると、留学生は「おおー」「えー」「へー」といった多彩な反応を見せてくれる。日本の文化についてほとんど学んだことがない学生であれば、すべて初めて見る画像ばかりであり、驚くものも多いようだ。

わかりやすい日本語という点では失敗したことがある。論者は、日本語教育が専門ではないため、留学生にわかりやすく伝える工夫をしたつもりで実はわかりにくくなっていたということがあった。その一つが、先述するパワーポイントでの日本語の説明文である。論者は、中上級の学生にわかりやすいようにという配慮から日本語文にはすべてふりがなをつけるようにしていた。パワーポイントは、ふりがなを漢字の上につけるルビ機能はないため、漢字のあとに（ ）をつけてふりがなをつけるようにした。例えば「民俗学（みんぞくがく）は、日本人（にほんじん）の生活（せいかつ）を」といった具合である。とにかく漢字が出てくれば全てふりがなをふった。今から考えるとかなり簡単な単語もすべてふりがなをふっていたのである。すると、留学生から、「ふりがながついていて読みにくく、わかりにくい」という意見があった。たしかに、2～3行にわたる文章になると非常に読みにくい状態になっていた。そこで、その次の年度の「日本民俗学入門」からは、ふりがなをふるのは難しい語句のみにとどめ、基本的につけないことにした。ふりがなを外したことで「ふりがなをつけてほしい」という意見は現段階では聞かれないので、このほうが良いと判断している。

また、講義での話し方についても自らの中で誤解があった。論者は、もともと早口で話すタイプであるが、日本語能力が中上級である留学生のことを考えると、早口は聞き取りが難しいと考え、遅めにゆっくり話すようにしていた。ゆっくり話せば、聞き取りやすいと考えたからである。しかし、留学生から、「少しゆっくりかもしれません」という感想をもらい、話すスピードと聞き取りやすさについて考えるようになった。そのような折、ほかの先生から、「ゆっくり話すとかえって留学生は聞き取りにくいのではないのでしょうか。私たちが英語など、ほかの言語を聞くときも、遅い話より早い話のほうが聞き取りやすいと思いませんか。ゆっくり話すより、一つの言葉を何回も別の語彙に言い換えたり、繰り返して言うなどして話すほうが留学生にとって理解しやすいと思うので私はそのようにしていますよ」というお話をうかがった。確かにその先生がおっしゃる通りだと思い、その後は、速く話をしながら、一つの言葉を何回か言ったり他の言葉に言い換えるようにしてみた。留学生に「このスピードで話しても理解できますか」と授業中にたずねたところ、みな「だいじょうぶ、わかります」という反応であったので、話す速さは普段のままでも聞き取れるということがわかってきた。そこからは、「先生は早口ですから早すぎて聞き取れないのなら言ってくださいね」といいながら本来の話すスピードで話をしている。スピードは速いが、発音やイントネーションははっきり聞き取れるように心掛けている。しかし、ときどき関西弁になることがあるようで、留学生から指摘されている。だがその学生が「関西弁も習いたいので嬉しい」というので、これも大阪大学ならではの授業かもしれないと思い、自然体で話すようにしている。

3-2 授業中にタスクを行わせる工夫

日本の大学における日本民俗学や日本文化に関する講義は、先生だけが話をして、学生はひたすらその話を聞き、板書やメモを取るというのが一般的な形式である。演習形式でない限りは学生の意見を聞くことはあまりないのではないだろうか。しかし、留学生は、そのような授業形式をあまり好まない。一方的に聞くだけの授業はとても退屈に感じるようで、何か意見を求められて答えるとか、手を動かして何かのタスクを行うという授業形式を好むようだ。また、母語ではない外国語を90分聞き続けるというのはどうしても集中が難しいところでもある。自分も逆の立場ならかなり疲れるにちがいない。論者は、最初に授業を行ったときは、自分の中で「大学の講義はこのような形式だ」という思い込みもあり、いわゆる日本式の授業を行ったのだが、最初の数回は物珍しさから集中していた学生も、慣れてくるにしたがって、私語をしたり、寝てしまったり、という状態になってしまった。これは留学生の態度が悪いということなのではない。大阪大学日本語日本文化教育センターで学ぶ留学生は基本的に真面目で熱心に授業を聞くので、少人数の授業ではこのようなことはないと聞いている。しかし、論者の授業は50人前後の受講者がいることもあって、留学生の側も大勢の中ではどうしても気分がゆるみ集中力が途切れがちになってしまう。毎回、「あなたのことを見ていますよ」という強い視線を学生一人一人の顔を見ながら必死に投げかけて講義しているが、残念ながら気づかない学生もいる。数回授業をやってみて、自分が一方的に話すだけではだめだということがよく理解できた。そこで、いかに留学生の集中力を持続する授業を行うかということについての改善策を考えて行うことになった。

まず行って見たのは、授業中に出てきたトピックについて、「あなたの国ではどうですか」という意見を聞くことであった。日本人学生に対して意見を聞くと、あまり反応がよくなかったり、声が小さく消極的だったりするのだが、留学生はみなイキイキと回答してくれる。先述するように受講者は、世界各国からの留学生であるので、たとえば食生活についての授業で、普段何をどのように食べているのか、などについて話を聞くとさまざまな国の食生活の話を一度に聞くことができる。聞くだけでも、単純に知識を広げることができるが、論者が重視しているのは、「異文化理解」や「比較考察」の力をつけることである。日本の食生活と自国の食生活、さらにほかの国の食生活は「どこが違い、また、どこが共通しているのか」ということを考えてもらうことが、学生の比較の目を養うことにつながる。ゆえに、学生の話聞いたあと、違っている点と共通点についてまとめてわかりやすく説明するようにしている。

そして、次に行ったのが、クイズ形式を取り入れることである。授業では、パワーポイントのスライドをレジメとして配布しているのだが、これを配布することにより「手を動かす作業がないと寝てしまう」という学生からの意見があり、考えた形式である。一時期、学生が自分でメモを書きとる形式に変えたこともあったが、母語以外の言語を聞きながら書き取るとは留学生にとって大変な負担であり、話のスピードと学生のメモを取るスピードが全く追いついていかない事態が発生してしまったので、再びパワーポイントを印刷したレジメを配布することにした。しかし、学生が寝てしまう事態も避けたかったので、レジメをとるところどころ穴埋め形式にしてみたのである。講義で覚えておいてほしい語彙を穴抜きにして、「ここには何が入ると思いますか」とクイズのようにしてみたのである。留学生たちは口々に答えを言ってくれ、楽しそうな雰囲気にはなった。しかし、これについては、賛否両論あり、楽しんでくれ

る学生と、つまらないと思う学生がいたので、今後、改善していきたいと考えている。

そのほか授業中に行うタスクとして、授業の最後に出席カードを配布し、授業の内容について考えたことや感じたことを一言書いてもらうことにした。書く前に、「今日の講義内容で自分の国と比較して考えたことや、質問を書いて下さい」と伝えた。すると、「自分の国と比較するところのような点が面白かった」とか、「この点について詳しく知りたかった」という次回の講義に活かせるような意見がみられるようになった。また、留学生は授業後に感想を書くというタスクがあるということで、授業中ずっと居眠りするということにはいけなくなり、居眠りする学生が減ってきた。

3-3 体験するものを取り入れる工夫

何らかのタスクがないと寝てしまう学生のために、何かよい方法はないかと思って考えたのが、実際に体験してもらうものを取り入れることであった。

「日本民俗学講義」では民間信仰として「千羽鶴」について取り上げているが、ここで、実際に千羽鶴を折る体験をしてもらうことにした。受講者全員に折り紙を配布し、鶴の折り方を教えて折ってもらった。一部の学生はすでに折ったことがあり、上手にすぐ折れるのだが、大半の学生は初めての体験で、羽や首の部分の折り方が難しいようで悪戦苦闘していた。机をそれぞれ回って折り方を教えていき、予想以上に大忙しとなった。学生の反応は上々で、「面白かったので、家でも折りたい。まだ折り紙の余りがあればもらえませんか」という学生が数名いた。ここで学生に教えたかったのは、「折り鶴がいかに手間のかかるものか」という点である。一羽折るのに手間がかかるものを千羽集めるのは相当な労力のものであるということを身をもって体験してもらいたかったのである。千人針などでもそうだが、日本の民間信仰のものは数を多く集めたり、多くの人の労力を集めたりするものが多い。手間のかかるものを多人数でやり遂げることで神仏の力がもらえると信じられていたのである。そのことを理解してもらうため、実際に折る作業を体験してもらったわけだが、大変手間がかかるものだという点での理解はしてもらえたのではないかと考えている。

また、「袈裟信仰」や「四国遍路」についての授業のときには、実際の衣を着る体験もしてもらった。袈裟は布でレプリカをつくり、論者自らが身に着けるところを見せて、袈裟の大きさや着用の複雑さをみてもらった。また、以前調査のときに使用した四国遍路の笈摺（おいずる）という白衣の上に身に着ける衣を学生に身に着けてもらったこともある。やはり学生が身に着けると教室中がとても盛り上がる。みな一斉にスマートフォンで写真を撮っていた。実際に着ている姿を間近に見るということは、おそらく記憶にも残りやすいのではないかと考えている。

3-4 自分の経験談について話し笑いをおこす工夫

論者は、日頃から楽しく笑いがおこる授業を行いたいと考えている。自分自身もそうだったが、楽しいと思って聞いた話は記憶に残りやすいと考えるからである。それゆえ、講義や発表、講演会などでは、聞いている人が「今日面白かった。来てよかった」と思ってもらえるように、できるだけ笑って楽しく聞いてもらえるよう工夫してきた。それゆえ、これまでは日本人を対象とした授業や講演会などでは笑いをとることができていた。しかしながら、留学生を対象とした授業を行い始めてからは、いままで培ってきたはずの自信が崩れ去ってしまった。という

のは、「これは面白いから笑いが起こるであろう」と思って発言したことに、ことごとく笑いが起こらず、シーンと静まりかえってしまったからである。論者は、笑いがすべったお笑い芸人のようにうちひしがれた。「なぜ笑いが取れないのか」とお笑い芸人と同様の悩みを真剣に考えた。そこで気が付いたことは、日本人が笑う内容は、日本人にとっては面白くても、文化的背景が異なる留学生には笑いにつながらないということであった。つまり、国が違くと、笑いのポイントが全て異なるのである。ゆえに、日本人に話すのと同じ話では全く笑いは起こらないということになる。しかし、なんとか留学生全員を笑わせることはできないものか、世界各国から来ている留学生が共通して笑う内容は何なのだろうか、と思い悩みながら授業中にさまざまな語りを試してみた。しかしながら最初の学期はほとんど笑いがとれずに終わってしまった。学期の終わりには毎回授業効果アンケートをとるようになってきているが、アンケートに書かれた学生のコメントを読んでいたところ、「先生の四国遍路の経験を話したところが一番面白かった」と書いていた学生がいた。確かに、四国遍路のことを授業で取り上げたときに、自分の四国遍路でのトラブルや失敗談について話した。そういえばそのときは笑いが起こっていたということ思い出し、もしかすると自分の経験談が意外と面白いのかもしれないと思うようになった。そこで、次の学期では、自分の経験談を授業中に取り入れながら話すようにしてみた。すると、留学生たちが次々に大きな声で笑いはじめたのである。誤解されないために述べておきたいが、私が極めて面白い経験談を持っているというわけではない。おそらく同じ話を日本人学生にしてもこんなに笑うことはないし、クールな大学生はほとんど笑わないと思われるのだが、意外なことに、失敗談や家族、友人の面白エピソードを話すと大きな笑いが起きることがわかったのである。確かによく考えてみれば、人間の行動は、国が違っていてもさほど大きくは違わないので、共通理解ができ、失敗談なども「あー、あるある」とか「先生にもそのような一面があったのか」ということで笑いが起きるようだ。その日は笑いがずっとおこり続け、論者はようやく自信を取り戻すことができた。笑いのポイントをつかむことができてからは、無理をしなくても授業中に笑いが起きるようになった。笑いが起きるようになると、学生の集中度も上がり、真剣に話を聞く学生が増えた。前の学期でも、留学生はもちろん話は聞いていたが、眠そうな顔をしていたり、あまり覇気がなかったように思う。学生の様子を見ていて「先生の話面白い。次は何の面白い話をするんだろう」というような目をして聞いているのがよくわかるようにもなった。考えてみれば、留学生にとって、論者も「日本人」であり、一人の日本人としての論者の経験談は、日本人の生活や文化を理解する上で一つの事例となっているため、具体性があり、面白いと感じる点が多々あるのだろうと思われた。様々なテーマに合わせて語る論者の経験談により、理解がしやすい面もあるのだろう。そこで、恥をしのんで生活習慣や文化を自分の身を通して語るようにしている。

笑いがおきるようになってからはクラス全体の雰囲気もよくなったので良かったのだが、学生があまりにも「つぎは何の面白い話をしてくれるのかな」とワクワクして待っているのが感じられるために、逆に、「これは面白い話をしなければ学生ががっかりしてしまう」という変なプレッシャーを常に自分にかけることにもなってしまった。

3-5 地図を見せ、行き方を教える工夫

留学生の多くは、日本滞在中に各地へ旅行へ行く。それもあって、授業中、日本の様々な名

所や特産物、祭りなどのイベントについて語ると、留学生たちは興味を持って聞いてくれる。そこで、授業中、場所について語る際には、地図やお土産物情報なども取り入れ、詳しい情報を伝えるようにしてみた。すると徐々に、「先生、先日先生が授業で言っていた広島のお社に行ってきましたよ」というような声が聞かれるようになった。そして、春～夏学期の妖怪についての話を聞いたある留学生たちは、可愛い河童の絵が描かれたTシャツをインターネットで購入し、修了式後のパーティにおそろいで着用して現れ、「先生、いっしょに写真を撮りましょう」と言ってくれた。そのうちの一人は、河童の女性用フェイスマスク（フェイスマスクに河童が印刷されているもの）を「旅行に行ったお土産です」といってプレゼントしてくれた。授業で行ってきた工夫の効果が感じられ、とても嬉しい出来事であった。

おわりに

「日本民俗学入門」と「日本民俗学講義」における論者の取り組み内容について述べてきた。これまで張り切って取り組みつつも失敗したことも多く、未熟な点が多いことを改めて感じる。

本稿で述べたことは現時点においても、試行錯誤しながらすすめている段階のものであり、これからも試行錯誤しながらの授業の改善は続く。これからも日本民俗学や日本文化を留学生により深く理解してもらえよう、いろいろな工夫を試みたいと思っている。もし、本稿をきっかけとして、留学生向けに日本民俗学や日本文化を講義されている先生方と講義方法に関する情報の共有や新たな教授法についての議論、教え方についてのご教示等を頂ければ大変有り難いことである。

(まつむら かおるこ 本センター准教授)